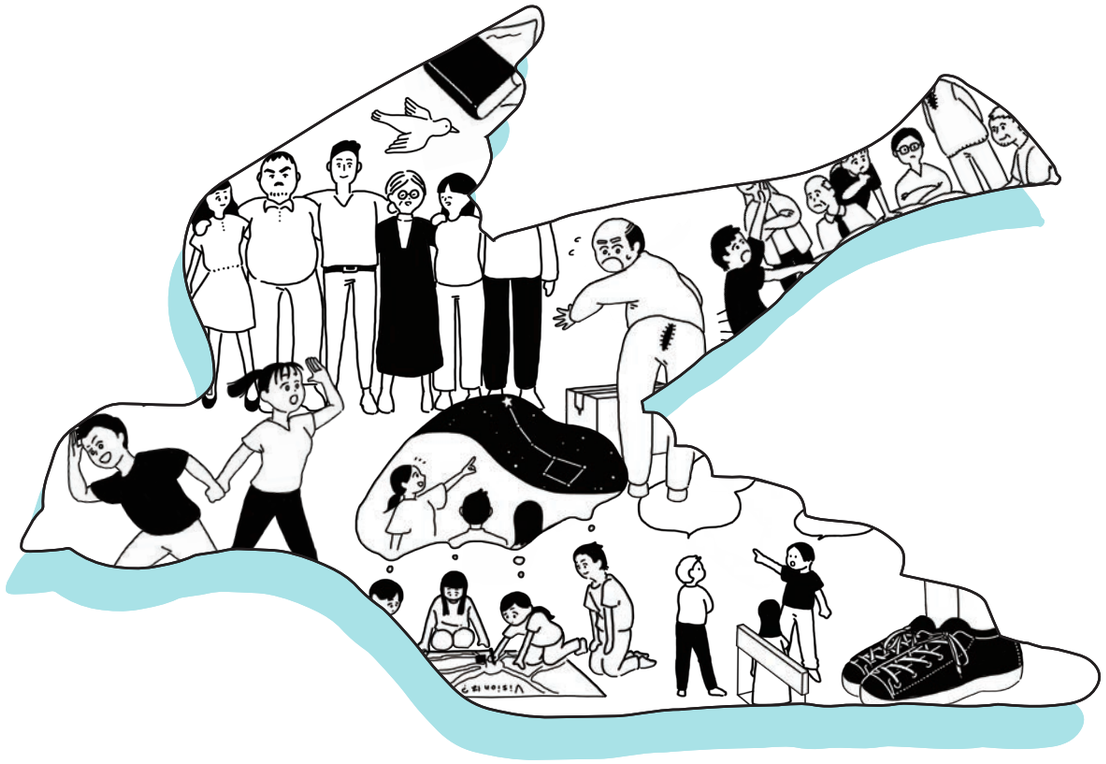
hint

豊かな社会を実現する市民参加のすすめ方



市民参加研究会

市民参加で、もっと豊かな社会を！

**実際にボランティアに参加している人の声と受け入れ団体の声を集めました。
ボランティアに参加することで個人にどんな変化があるのか、団体にとってどんな意義があるのか、
そしてその先にどんな豊かな社会が育まれるかを想像していただければと思います。**

ボランティアに
参加することで、自分が知らなかった世界を知り、理解度や視野が広くなった。
学習教育の視点から福祉支援の側に回ると心の視点が加わる。こんな状況の子がいるんだと気づいた。
（30代 女性）

ボランティアに
無理させない、つぶさない。
やりたいことはそれぞれ違う。私ができる範囲でやりたいことを大事に見ていてくれる、ここで何かできることがある！と思えたところが心地よかった。
（60代 女性）

10代から参加しているので、
えらい目に遭った（笑）。ボランティアをする前とは性格も考え方も変わった。就職して社会人になってからは、ボランティア協会から会社に出向しているような感覚。職員を雇っているのは自分たちボランティアだという気持ちすらある。（40代 男性）

人前で話すことなんて本当に
苦手だったし、やりたいことを形にしようという意欲もなかったが、この団体でいろいろな人と関わってチャレンジできたことは、自分の内面を変えた。自身がエンパワメントされた。人との関わりの中で、自分も誰かをエンパワメントをしようという気持ちが芽生えた。（30代 女性）

ボランティアに
入って、地域のごみ拾いは意識して行うようになり、地域の大切さを感じるようになった。前はゴミが落ちていても、見ているだけで行動には移さなかった。人と関わりのある仕事を見て、将来の選択肢への視野が広がった。（10代 男性）

長く住んでいた場所だったが、
参加する前には職場や学校以外の知り合いはいなかったことに気づいた。地域の知り合いが増え、地域に興味を持つようになった。どこに何があるか、知るようになり、居心地の良い場所になった。（30代 女性）

団体の声

力や個性が違う人たちが「まざりあい」ながら、社会の中でそれぞれの力を発揮してほしいですね。そのためには多様な人、物、場があることが大切だと思います。多くの出会いの中で、その人にとって一番いい場所が探せる環境になればいいなと思います。そのような「まぜこぜ」の環境には、ボランティア参加は欠かせないと思います。
（40代 ボランティアコーディネーター）

NPOなどの社会的な活動を、受け身ではなく「自分ごと」として捉える人が増えると、どんどん社会は楽しくなっていくと思います。ただし「全員参加」はまずありえません。活動に共感した人が「参加したい」と思った時に活動できる、自由度のある余白があることが、太く長くボランティア活動に参画する人が増える秘訣だと思います。
（40代 ボランティアコーディネーター）

市民参加をすすめていきたい団体の方へ

人と人が関わると必ず面倒なことも起こりますが、
それをなくそうとするよりも、
楽しみながら何とかしていく取り組みの中で
新しい発見や広がりが生まれます。

この冊子は、不安をたちまち解消する「答え」ではなく、
現場の実践の中から生まれた工夫や
大切にしている価値観を紹介しています。

きっとあなたの悩み・疑問に寄り添う「ヒント」が見つかるでしょう。

この冊子はトヨタ財団のイニシアティブプログラムにより実施された「多様な人々の地域/社会参加を促進するための助成プログラム開発に向けた調査事業」（代表：早瀬昇・市民参加研究会、事務局：社会福祉法人大阪ボランティア協会）の一環で作成したものです。研究会では各地で市民参加に積極的に取り組んでいる団体へのヒアリングやパイロット助成などを実施しました。（より詳しくはP.24をご覧ください。）

市民参加の良さや必要性は理解できていても、
市民参加を進めるのは難しいと感じているあなた。
一緒にヒントを見つけ、市民参加の扉を開いてみましょう！
その先には心強いサポーターも待っているはずです。

Let's go!

hint 豊かな社会を実現する市民参加のすすめ方

もくじ

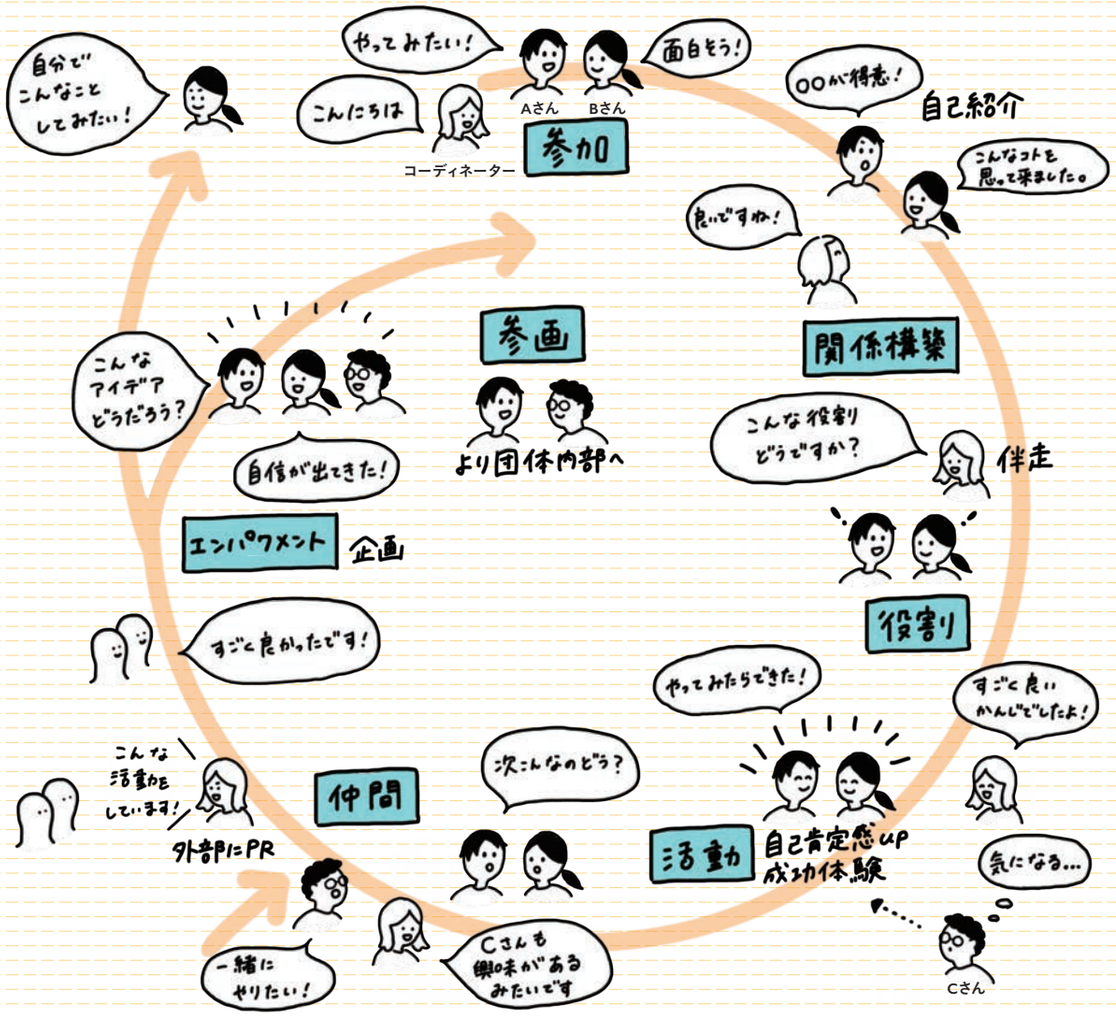
P.2 市民参加でもっと豊かな社会を！
P.4 この冊子を読みすすめる前に
P.6 市民参加のサイクル
P.7 コラム1「NPOは参加と協力を」
P.8 市民参加を促す実践団体へのヒアリング
P.10 市民参加の10のポイント
P.20 コラム2「シニア世代の市民参加」
P.21 コラム3「楽しさと正しさ」
P.22 参加を促進する組織になるための5つのステップ
P.24 市民参加研究会とは
P.25 あとがき
P.26 ことば辞典

市民参加のサイクル

研究会で人々が市民活動に参加するきっかけについて、議論した中で出てきた「参加のタイミング」をまとめました。社会課題に向き合う大きなきっかけがあったことや、時間ができたといったライフステージの変化など、いくつかのケースがありますが、案外多いのが知り合いに誘われたといった受け身のタイミングです。
また、各団体のボランティアの方から、参加してから少しずつ参加の度合いが深くなっていくストーリーを伺いました。その共通性を「市民参加のサイクル」としてまとめたものが下の図です。参加の度合いが深まっていくタイミングでコーディネーターが関わっているようです。こうした循環こそが市民参加の醍醐味なのではないでしょうか。

市民参加のタイミング

- ☑ 「一緒に行こう」と誘われた
- ☑ 講座やイベントに参加して興味を持った
- ☑ 子どもができる・退職するなどライフステージが変化した
- ☑ 時間ができた
- ☑ 「放っておけない」状況に出会った
- ☑ 自分や身近な人に困ったことが起きた
- ☑ 居場所・出番がない
- ☑ 助けて！一緒にやって！と呼びかけられた
- ☑ 当事者になる、当事者であることに気が付いた



01
NPOは参加と協力を

社会福祉法人
大阪ボランティア協会
理事長 早瀬 昇

主な著書：『「参加の力」が創る共生社会 市民の共感・主体性をどう醸成するか』

「ＮＰＯって何？」と聞かれたら、「利益ではなく使命実現を第一に考える組織」というのが教科書的な答え。しかし、この特徴だけなら行政も一緒。行政も営利を目的としない組織です。

ＮＰＯという組織の、より重要な特徴は「誰も持ち分を持たない組織」だということ。特定の誰かのものではないからこそ、その場に“参加”する人々の“協力”の舞台となることができます。そこに集う人々の思いがエネルギー源となり、それぞれの個性を活かし創意工夫を積み重ねることで、ＮＰＯの創造的な展開が生まれます。全体で合意できることを行動基準とする行政や、結局は株主という所有者のものである企業と異なるＮＰＯの特徴が、ここにあります。

しかし、この「参加の力」を活かしていないＮＰＯが少なくありません。

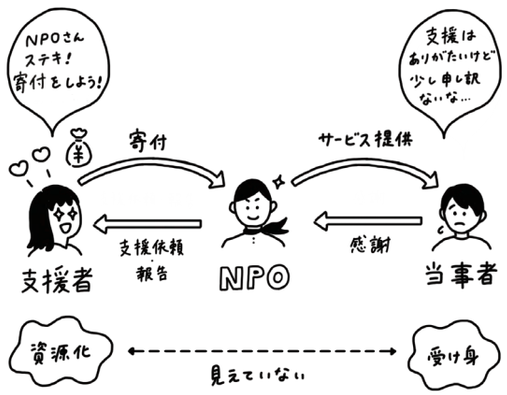
市民の参加がないＮＰＯは、結局、企業との違いが判然としません。企業も、多くの顧客のニーズ、つまり社会的な課題解決のための商品を開発・提供するため、日々努力しています。消費者に共感される存在であろうと社会貢献活動にも熱心に取り組み、社会的責任を自覚した活動を広く展開する企業を前にして、ＮＰＯは何を自らの特徴だと言えるのでしょうか。

この問いの答えが「参加」です。人々は、参加を通じて当事者の課題と向き合い、その解決に努力する過程で、他人事だった課題を自らの課題だと自覚できます。こうした当事者意識をもつ人々を生み出し、人々が協力して課題解決に参加できる場を提供することは、ＮＰＯのもっとも重要な役割です。

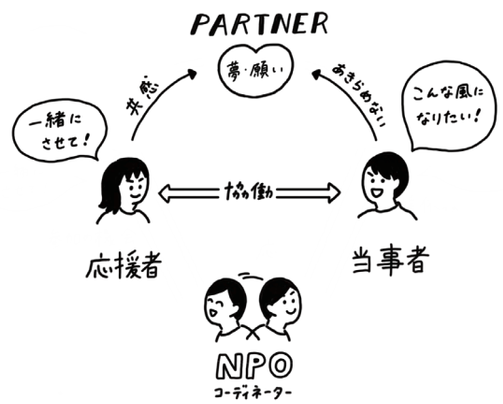
つまり、「参加」はボランティアや寄付という事業を進める“資源”を調達する“手法”に留まるものではありません。ボランティアや寄付者と協力し、ボランティアも寄付者も、さらに当事者も社会を良くしていく“主体”となれるための舞台を提供することです。

「参加がなければＮＰＯとは言えない！」のではないでしょうか…？ 知らんけど

NPOが主役タイプ



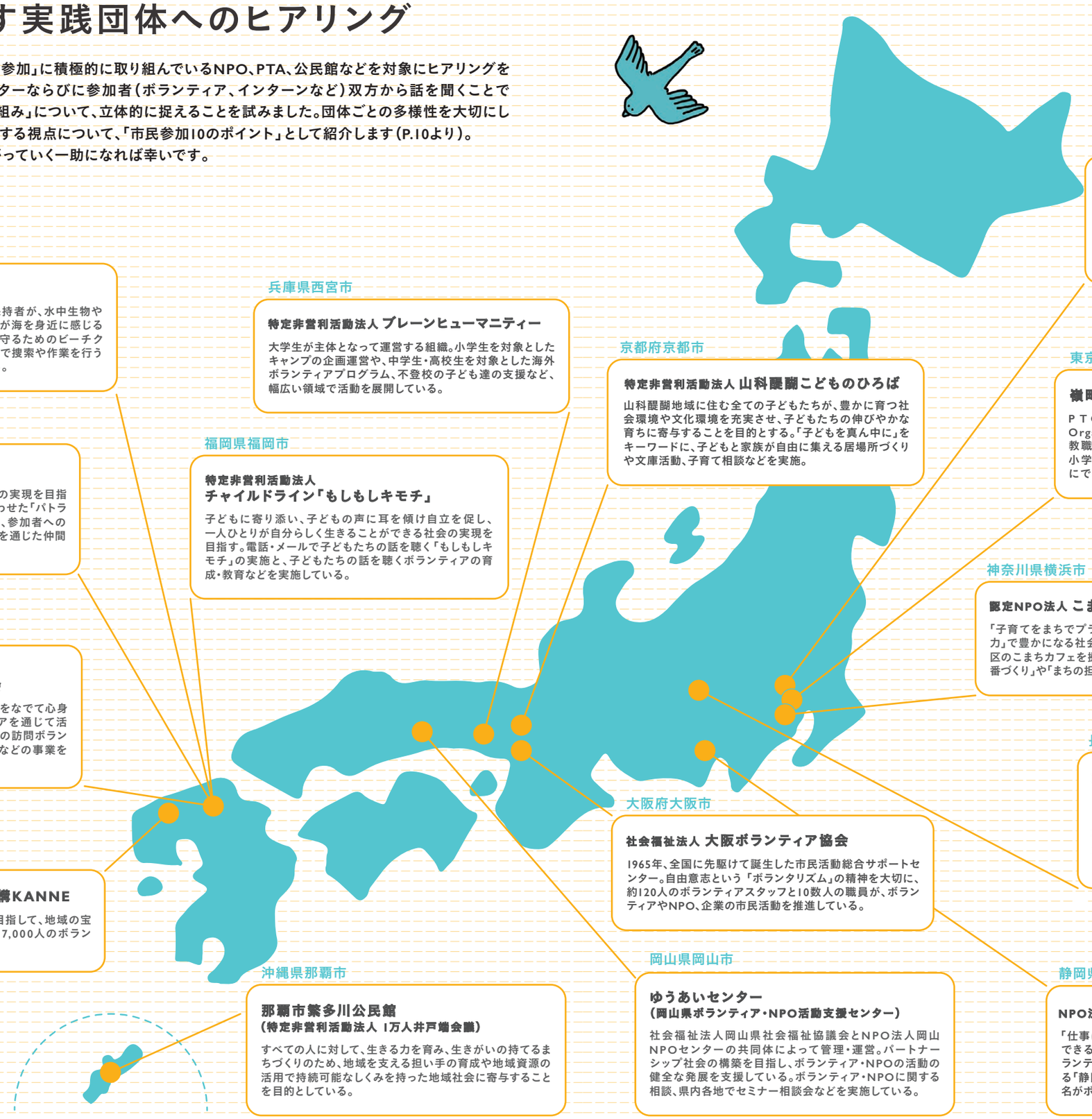
当事者・市民が主役



支援者を募るだけか、より積極的に市民参加を進めるかで、当事者や支援者の立場が大きく異なります。
多くの人々の思いと力を活かせるのは……、もちろん積極的な参加推進タイプです。

市民参加を促す実践団体へのヒアリング

研究会メンバーの推薦を受け、「市民参加」に積極的に取り組んでいるNPO、PTA、公民館などを対象にヒアリングを実施しました。団体のコーディネーターならびに参加者（ボランティア、インターンなど）双方から話を聞くことで「市民の参加促進における工夫や仕組み」について、立体的に捉えることを試みました。団体ごとの多様性を大切にした結果、体系化はせず、いくつか共通する視点について、「市民参加10のポイント」として紹介します（P.10より）。
多様な参加の場が地域や社会に広がっていく一助になれば幸いです。



福岡県福岡市

一般社団法人 ふくおかFUN

スキューバダイビングのライセンス保持者が、水中生物や環境の観測・調査・記録や、一般の方が海を身近に感じるための体験型イベント、海の環境を守るためのビーチクリーンアップ活動、災害発生時に海中で捜索や作業を行うダイバー育成事業などを実施している。

福岡県宗像市

NPO法人 改革プロジェクト

子どもや女性が安心して暮らせる地域社会の実現を目指して、防犯パトロールとランニングを掛け合わせた「パトラン」を実施。「地域の安全づくり」だけでなく、参加者への「健康づくりと防犯意識の向上」そして「活動を通じた仲間づくり」を目指す。

福岡県太宰府市

認定NPO法人
日本セラピューティック・ケア協会

英国赤十字社が考案した、肩や背中、手などをなでて心身をケアする“手当て”セラピューティックケアを通じて活動。高齢者施設や緩和ケア病棟、ホスピスへの訪問ボランティア、子育て支援、被災地支援、人材育成などの事業を行っている。

佐賀県唐津市

NPO法人 唐津環境防災推進機構KANNE

人々のくらしと自然環境の共存共繁を目指して、地域の宝である虹の松原の再生・保全活動に約7,000人のボランティアと一緒に取り組んでいる。

沖縄県那覇市

那覇市繁多川公民館
（特定非営利活動法人 1万人井戸端会議）

すべての人に対して、生きる力を育み、生きがいの持てるまちづくりのため、地域を支える担い手の育成や地域資源の活用で持続可能なしくみを持った地域社会に寄与することを目的としている。

兵庫県西宮市

特定非営利活動法人 ブレーンヒューマニティー

大学生が主体となって運営する組織。小学生を対象としたキャンプの企画運営や、中学生・高校生を対象とした海外ボランティアプログラム、不登校の子ども達の支援など、幅広い領域で活動を展開している。

福岡県福岡市

特定非営利活動法人
チャイルドライン「もしもしキモチ」

子どもに寄り添い、子どもの声に耳を傾け自立を促し、一人ひとりが自分らしく生きることができる社会の実現を目指す。電話・メールで子どもたちの話を聴く「もしもしキモチ」の実施と、子どもたちの話を聴くボランティアの育成・教育などを実施している。

京都府京都市

特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば

山科醍醐地域に住む全ての子どもたちが、豊かに育つ社会環境や文化環境を充実させ、子どもたちの伸びやかな育ちに寄与することを目的とする。「子どもを真ん中に」をキーワードに、子どもと家族が自由に集える居場所づくりや文庫活動、子育て相談などを実施。

大阪府大阪市

社会福祉法人 大阪ボランティア協会

1965年、全国に先駆けて誕生した市民活動総合サポートセンター。自由意志という「ボランタリズム」の精神を大切に、約120人のボランティアスタッフと10数人の職員が、ボランティアやNPO、企業の市民活動を推進している。

岡山県岡山市

ゆうあいセンター
（岡山県ボランティア・NPO活動支援センター）

社会福祉法人岡山県社会福祉協議会とNPO法人岡山NPOセンターの共同体によって管理・運営。パートナーシップ社会の構築を目指し、ボランティア・NPOの活動の健全な発展を支援している。ボランティア・NPOに関する相談、県内各地でセミナー相談会などを実施している。

埼玉県さいたま市

特定非営利活動法人 クッキープロジェクト

障がいのある人もない人も、会社員も学生もフリーターも、大人も子どもも、多様な人が「まぜこぜ」になって暮らす社会を目指す。地域の方と共同で福祉作業所の商品開発に取り組み、クッキーづくりを通じて様々な人が出会う機会をつくっている。

東京都大田区

嶺町小PTO

PTOは「Parent（親）ーTeacher（先生）ーOrganization/Ouendan（団体/応援団）」の略。保護者と教職員による団体で、他校ではPTAと呼ばれている。嶺町小学校では義務化していたPTA活動を廃止。「できるときにできることをできる人がやる」を基本概念に活動中。

神奈川県横浜市

認定NPO法人 こまちぷらす

「子育てをまちでプラスに」を合言葉に、子育てが「まちの力」で豊かになる社会を目指し、活動している。横浜市戸塚区のこまちカフェを拠点に居場所を通した「対話の場」「出番づくり」や「まちの担い手」を育む場の創造に挑戦している。

長野県飯田市

飯田市公民館

1. 「住民参画の原則」が特徴であり、住民の自由で主体的な学習活動を支援し、地域自治を担う人を育んでいる。
2. 地域住民から選出された専門委員が中心に企画・運営。
3. 地域からの推薦により教育委員会が任命した館長と市役所職員である公民館主事が支える運営体制となっている。

静岡県静岡市

NPO法人 青少年就労支援ネットワーク静岡

「仕事に就くことを支援するのではなく、働き続けることができる人生に寄り添う」ことを目的に活動している。市民ボランティアが地域の若者に寄り添い、働き続けることを支える「静岡方式」と呼ばれる就労支援のしくみを徹底。約1300名がボランティアに登録中。

NO 1

参加を支える組織文化が大切

団体のビジョンや市民参加についての
考え方を団体内で共有すること。
代表者、コーディネーター、
スタッフだけでなくボランティアとも
ビジョンや市民参加について
定期的に対話することが大切です。

CASE : 1

「4つの運営原則」（地域中心の原則、並立配置の原則、住民参加の原則、機関自立の原則）にそった住民主体の事業運営が根付いています。また、新たな担当者が異動してきても住民との協働を学ぶ姿勢が継承されています。

飯田市公民館

CASE : 2

明文化はしていないが、「自分たちでやらない」を大切に。相互扶助の社会をつくるというのをミッションとして掲げています。

NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡

CASE : 3

団体の理念が「障がいのある人もない人も、会社員も学生もフリーターも、大人も子どもも、いろんな人が『まぜこぜ』になって暮らす社会」。ボランティアの多様性が「まぜこぜ」の実現に必要だとボランティアにも伝えるようにしています。

特定非営利活動法人クッキープロジェクト

NO 2

対等に関わり合える仕組みづくり

スタッフとボランティアが対等である
ということをみんなが意識することと、
それを実感できる仕組みづくりが大切です。

CASE : 1

ボランティアも職員も全員「アソシエーター」と呼びます。毎年行う新人研修はボランティアも職員も一緒に受講します。研修では、職員とボランティアの役割は違えど対等で同じ目標をめざしているということを伝えています。

社会福祉法人大阪ボランティア協会

CASE : 2

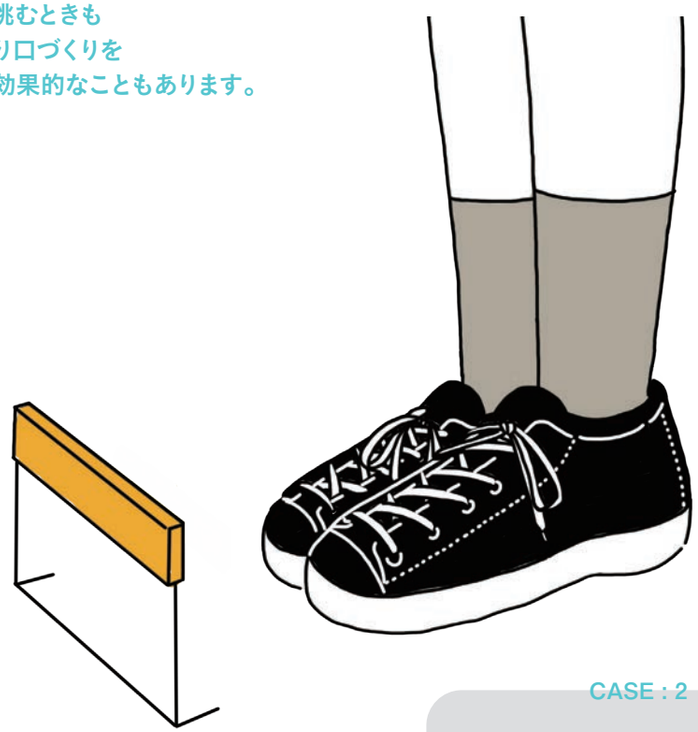
学生（ボランティア）が主体。理事の選考も学生が行っています。専従職員は学生に雇われているという考え方。職員の給与も学生理事等が査定をして決まっています。

特定非営利活動法人ブレーンヒューマニティー

NO 3

敷居は低く

参加のきっかけの一つは、楽しい、おいしいなど。
敷居の低い入り口は多様な人の
参加の促進につながります。
しんどいことに挑むときも
参加しやすい入り口づくりを
意識することが効果的なこともあります。



CASE : 1

運動会の見回りボランティアは「100人募集！」ですが、実は20人でもできます。1人10分くらいの参加だと「こんなことでいいの？」と感じ、それが次の参加につながります。見回りのようなやらなければいけない活動はみんなでつくり、気軽な活動の入り口となるようにしています。

嶺町小PTO

CASE : 2

障がいを抱えていると自己肯定感が下がりがち。だけど「まぜこぜ」という理念を聞いて、ボランティアに参加する時すごく敷居が低く参加しやすいと感じられます。

特定非営利活動法人クッキープロジェクト

CASE : 3

防犯のため、当然暗い夜道を走りますが、集団だから女の人でも安全だという説明をします。また、ドタキャン・ドタ参があってもいいからと伝え、参加が義務的で負担にならないようにしています。

NPO法人改革プロジェクト

NO 4

プログラムやルールも大事

敷居の低さ、楽しさも大事ですが、
プログラムや学びの場があることもまた
参加のしやすさにつながります。
支援の対象者を守るためにも、
ボランティアであっても一定のスキルや知識を
身に付ける機会が必要です。

CASE : 1

キャッチャー（電話の受け手）希望者は、全10回の講座受講終了後、最低2回は現場を見学し振り返りをします。その上でスーパーバイザーの判断と承認を得て登録。その後ボランティアをスタートできます。

特定非営利活動法人
チャイルドライン「もしもしキモチ」

CASE : 2

永続的に組織を運営していくため、細かなことまでもマニュアル化・ルール化して、安定したサービスを誰でも同じように提供できるように工夫しています。職員・ボランティアの業務の手引き書として、これまでのノウハウを蓄積したマニュアル集「六法全書」を備え、事あるごとに参照するようにしています。

特定非営利活動法人ブレーンヒューマニティー

CASE : 3

まず最初に、5分ほどの紙芝居（ストーリー）で「なぜ松原保全が必要か」の目的の説明をしてから作業に入ります。また、その日の活動内容（手順・場所・作業量）などの指示を明確にし、活動の成果もはっきりわかるように意識しています。

NPO法人唐津環境防災推進機構KANNE

NO 5

具体的な役割をつくる

参加とは、役割です。
参加の機会をたくさんつくる＝役割をつくること。
役割と出番をどう生み出すかが大切です。

CASE : 1

ボランティア活動を求めて公民館に来た人が、いつ来ても仕事があるように準備をしています。せっかく来てもやることがないということがないようにしています。

那覇市繁多川公民館

CASE : 2

ゆうあい彩り隊（活動スペースの装飾）、整え隊（整理整頓）、伝え隊（新聞の切り抜きの掲示他）などの活動内容のわかりやすい、関わりやすい小チームを作って参加してもらっています。

ゆうあいセンター

CASE : 3

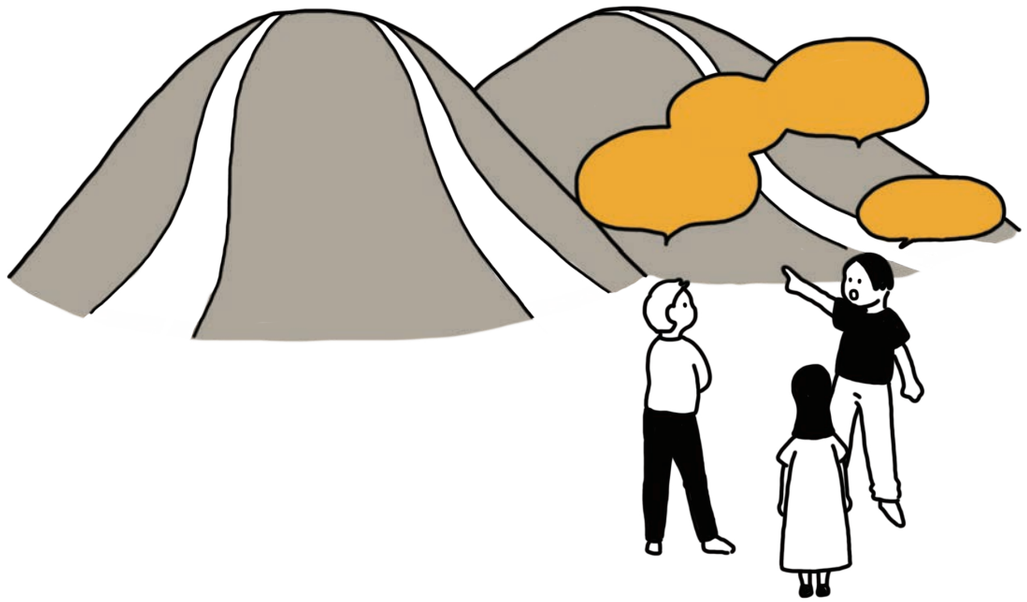
来てよかったなと思ってもらうためには、役割があることが必要です。高齢で現場に来ることができない人にも、知り合いにこのような活動を紹介して頂けることも立派なボランティアですよと話しています。みんなにできることがあり、「自分が守っている松原だ！」と思って欲しいです。

NPO法人唐津環境防災推進機構KANNE

NO 6

工夫する余地（あそび）がある

ボランティア参加のプログラムは、
一定のルールや参加方法などのプログラムが
わかりやすく発信されていることが必要です。
一方でコミットメントをより深めていくためには、
ボランティア自身が主体的に取り組める
余地（あそび）があることも大事です。



CASE : 1

地域の人、ボランティア、子どもと参加者の違いや境目がない。最初から提案型でやって来る人と、参加者として来ている中で企画提案が出てくる人もいます。やることは拒まない。どうやってやるかを考えてもらうようにします。

特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば

CASE : 2

若い職員はやりすぎちゃう。もっとボランティアに力を借りないと、自分たちだけでやっているよりも良いものできるから。もっともっと活躍の場をつくらないと、ということは話しています。

社会福祉法人大阪ボランティア協会

NO 7

コミュニティを育む

ボランティア同士の関係性、コミュニティを育むことも大事です。
ボランティアにとって仲間の存在がエンパワメントになります。
また、問題が起きた時ボランティア同士で解決することもできます。
コミュニティを育むことで、コーディネーターが
すべての役割を背負わなくてもよくなります。

CASE : 1

子どもの満足度より自分がやりたいことが先に出てしまう方の場合は、ベテランのボランティアさんと組んでもらいます。ベテランのボランティアさんは、「はい、時間！」とタイムマネジメントしたり上手にコーディネートしてくれます。

那覇市繁多川公民館

CASE : 2

こまちパートナー同士の交流の場でもある「ぷらす会」や、やりたいを形にする「企画の会」を通じて、ボランティア同士の相互メンタリングや伴走しあう関係の場を創っています。

認定NPO法人こまちプラス

CASE : 3

地域ごとにLINEでやりとりすることもあります。困りごとがあれば先輩ボランティアをつないだりもします。また、ボランティアも支援を受けている人もみんなが参加できる場を定期開催しています。そこで他の人の関わり方を見るなど学びの場となっています。

NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡

NO 8

一人ひとりの思いや個性を受け止める

参加する市民は多様です。
一人ひとりの個性を受け止めることで
その人にとっての居場所になっていきます。
時に言葉の奥にある思いを引き出すことも
コーディネーターの役割です。

CASE : 1

ゆるい（走るスピードに強い関心がない）ランナーの方が、防犯意識が高く、またそういう方はファッションに関心があることが多いので、よく見るようにしています。「お疲れ様」より「ありがとう」を使うことの方が多いですね。

NPO法人改革プロジェクト

CASE : 2

参加の入り口は様々で、「ボランティアしたかった」という人から「退職後時間があるからなんとなく」という人までいますが、次第に「奥が深いのでもっと勉強したくなった」「相手以上に自分が癒されたかも」等という言葉が出てくるようになるのが、嬉しかったですね。

認定NPO法人日本セラピューティック・ケア協会

CASE : 3

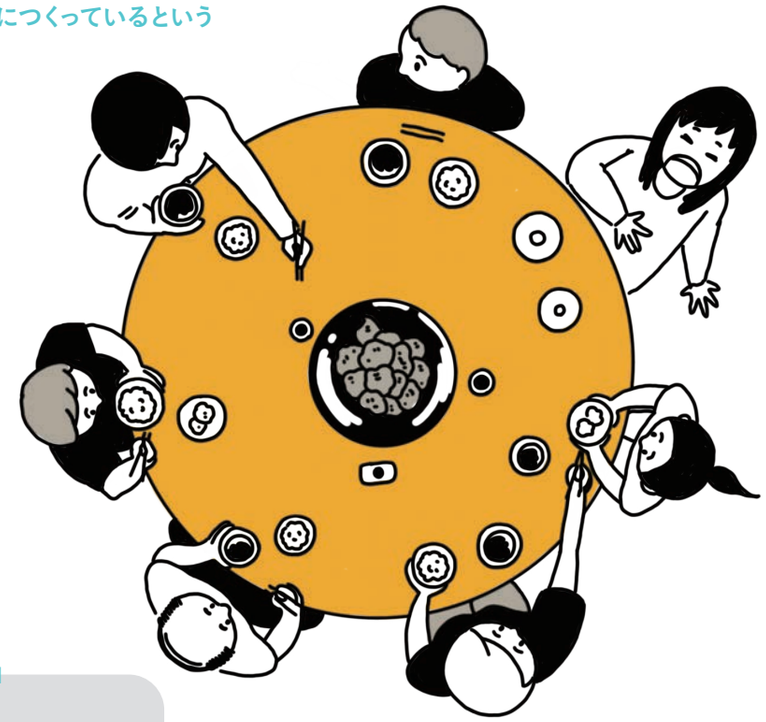
若い子は、素直に何かやりたいと言うのが恥ずかしい。それを引き出してあげることが重要。例えばボランティアが終わったら必ずアイスをあげているので、「何か手伝いたい」と言うかわりに「アイスない？」と聞いてくる子がいます。そういうときは、お手伝いしたいんだなと思って仕事を振っています。

那覇市繁多川公民館

NO 9

安心できる場づくり

参加の理由として「そこが自分にとって安心できる居場所だから」
と答えたボランティアの方は多くいます。
食事を一緒に食べる機会を持つなど
直接活動とは違う場を意識的につくっているという
声も多くありました。



CASE : 1

ボランティアへの休憩の声かけ、困りごとの責任はこちらで持つことなど、気遣いはきちんと言葉にして表します。話し合いでは誰かが否定されないように、みんなで一緒に考えることが基本になっています。

一般社団法人ふくおかFUN

CASE : 2

個々人のペースを重視しています。イベント的なものが好きな人、地道な活動が好きな人と人それぞれなので、個々のペースを考えています。

ゆうあいセンター

CASE : 3

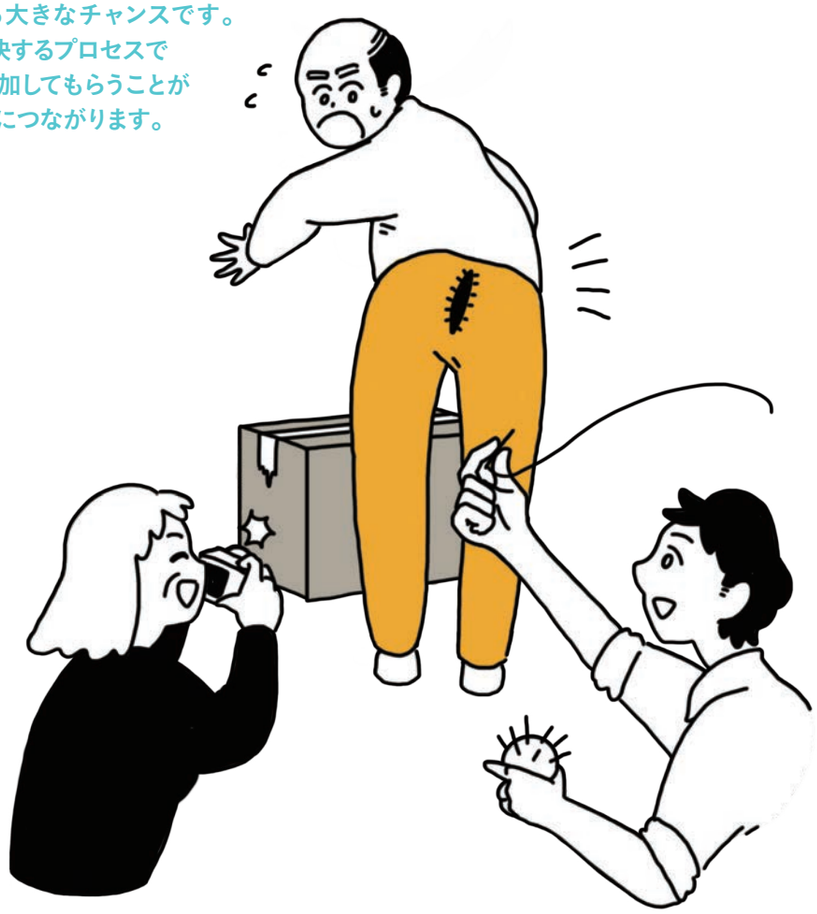
電話の受け取りが終わった後に、ごはんと味噌汁、副菜程度の夕食を皆で食べます。参加している人の振り返りとして得るものが多く、またケア的な意味合いでも大事にしている時間です。

特定非営利活動法人
チャイルドライン「もしもしキモチ」

NO 10

困りごとはチャンス！

楽しいと並んで困りごとは
参加を広げる大きなチャンスです。
困りごとを解決するプロセスで
多様な人に参加してもらうことが
参加の広がりにつながります。



CASE : 1

問題が起きた際には、問題と付き合い続けることが大切。困りごとを解決する為に、地域の様々な多くの人に関わってもらい解決につなげています。直接当事者同士だけで解決するよりも、みんなで解決できるよう人をつなぐことがコーディネートだと考えています。

那覇市繁多川公民館

CASE : 2

誰かに困りごとが起きた時は、本人の気持ちや願望を聞き出した上で、全体の場に出すようにしています。1人の問題をみんなの問題にする中で、自然と解決していくように進めていきます。

一般社団法人ふくおかFUN

02
シニア世代の市民参加

公益財団法人
長野県長寿社会開発センター

主任／シニア活動推進コーディネーター
戸田 千登美

仕事柄多くのシニアと話をする機会があります。「誘われちゃってさ〜」「頼まれちゃって・・・」と。多くのシニア（特に男性）は、誘われたり、頼まれたりすることがボランティアの参加のきっかけになっているようです。それも、知っている人に具体的な内容で誘われたり頼まれたりすることが、安心して活動に参加できるのだとか。「頼られるとなんかうれしいよね」とうれしそうに話すシニアのなんと多いことか。

ボランティアの参加のきっかけは意外と受け身なのかもしれません。

私が所属する団体（長野県長寿社会開発センター）がシニアの社会参加促進を目的に県内各地で毎年開催している「シニアの出会いの広場」があります。シニアを求める側と何かをしたいシニアが出会う場です。シニアを求める側はNPO、ボランティア団体、施設等々多様な団体が店出し方式で参加します。

この出会いの広場も誘われて参加するシニアが多くいます。団体を自由にめぐって話を聞くうちに、思ってもみなかった視点で自分が関われる活動を発見し、特技や趣味、経験が役立つことに気づきます。自分の住む地域の課題を知る機会にもなっています。

そして出店団体同士もつながり、共に課題を解決する新たな企画が生まれる等、思ってもみない化学反応が起きています。

出店にあたり、各団体には活動を始めたきっかけ、その想い、そこから見えてきた社会課題等々を意識して直接語ってもらいます。語る側のワクワク感がシニアに伝わる瞬間です。そのことで共感が生まれ「この人たちと一緒にこの活動をしてみよう」というきっかけづくりになります。

団体にとっても多くのシニアが社会の一員として役に立ちたいと思っていることを知ることで、活動の幅が広がり新たな活動につながっているようです。

実はみなさん、誰かの何かの役に立ちたいと思っているのではないでしょうか。

まずは一番身近な人に声をかけてみませんか。誘われるのを待っている人がきっといます。

社会のために役に立ちたいシニア層ですが、やる気はあっても、その一歩を超える勇気を持つことが難しいようです。その難しさを聞いたところ、ある男性は「対等に話すことに慣れてないからかなぁ」とつぶやきました。現役時代の肩書きがどこかで邪魔をしているようです。

そこで男性シニアのみなさんと、米袋に過去の肩書きを全部書き出し米袋をかぶって「肩書きをぶち破れ！！！」と米袋を破り脱皮する企画を実践してみました。笑いの中でみなさんすっきりとした表情になりましたが、もちろん一瞬で殻が破れるわけではありません。“脱皮”したからといって、いきなり羽ばたけるわけでもありません。

そこにコーディネーターの存在があるのだと思います。今まで経験したことのない活動に意味づけをしたり、戸惑いや尻込みにさりげなく寄り添うことによって、少しずつ気持ちが醸成され安心して新たな世界へとび立つことが出来るのだと思います。

このような男性シニアの生き方の変化が、市民社会をつくる参加の力になっていくのではないでしょうか。

03
楽しさと正しさ

特定非営利活動法人
ハンズオン埼玉

理事 西川 正

主な著書：『あそびの生まれる場所
「お客様時代」の公共マネジメント』

「楽しいから続いているんです」。しばしばボランティアから聞く言葉です。ではその「楽しさ」はどこから来るのでしょうか。

例えば、担い手が増えている組織では、「ふりかえり」をだいじにしている場合が多いようです。「今回の活動でお気づきの点があれば教えてください」と。そこで言った自分の意見が、次の活動に反映されていくことを知ると、その人は活動を企画する側に変わっていきます。

何かを変えていくことは、次の結果が見えなくなることでもあります。だから不安と期待でドキドキします。実は、このドキドキこそが、楽しさの源泉。子どもの遊びに限らず、人は何かに夢中になって取り組んでいる時、その人の表情は笑顔ではなく真剣です。「楽しかった」とは、一所懸命に取り組みそれを振り返ったときに初めて出る言葉です。楽であることと楽しいことは別のことなのです。また「（ボランティアは）仲間ができて楽しい」などもしばしば耳にしますが、人はドキドキを共有し、「あーでもないこうでもない」と一緒に工夫を重ねることで、仲間になっていくのではないでしょうか。「あの時は大変だったね」と言い合える関係に。

言い換えると、現場での工夫の余地が残されている、あるいは、常にそのやり方を参加者とともに見直していこうという組織文化がある、すなわち「何が正しいかについて、（上手に）揺れることができる組織」であるかどうかが、その活動の広がりを決めていくのではないでしょうか。自分が楽しいと感じる活動であれば、友人を誘えます。

その意味で、地縁組織の担い手不足の背景にあるのは、強固な正しさかもしれません。長年役員をやっている人が「そうするもんだ」と頭ごなしに言ってしまったり、逆に毎年役員が全員交代するような組織では、「前年通りという正解」をくずすのは至難の技だったり。

前例がないと不安感だらけ、前例だけだと負担感ばかり。どこまでどう変えるとドキドキが生まれるのか。この正しさと楽しさのバランスに腐心する人＝ボランティアコーディネーションの有無が、活動の楽しさと、その結果としての担い手の広がりを左右するのではないでしょうか。

参加を促進する組織になるための5つのステップ

新規事業開発、組織基盤整備、市民参加促進など新しいことを始める際はしっかりステップを踏み、進めることが大事です。自分が今どの位置にいるのかを確認しながらみんなで進んでいきましょう。

内部での話し合いや仕組みづくり、学びのための交通費・謝金・人件費などは、自費だと十分な投資がしにくいもの。
「市民参加プログラム」の助成についても、是非活用を検討してみてください。

認定NPO法人アカツキ
代表理事／職員
永田 賢介

STEP 1

まずは、団体内部で話し合おう！

どのような取り組みにおいても、新しい挑戦の際には組織のメンバーに負荷がかかります。どんなことが実現できるのか？どんな人に来てほしいのか？という夢と、何にいくら予算がかかるのか？既存業務の繁忙期や余裕は？といった現実のバランスを、代表や主担当だけではなく団体メンバーと一緒に考えることが重要。参加を促進するプロセスも「参加型」で進めることで、実効性の高い計画ができます。

STEP 2

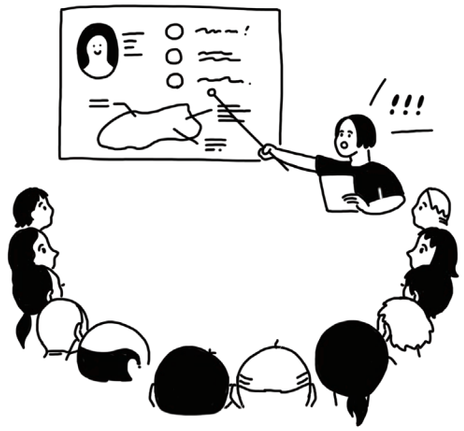
次に、直接見て学ぼう！

ボランティアやインターンの受け入れなど、人と向き合うことが多い参加の取り組みは、セミナーで知識を得るだけではなかなか実践に結びつきにくいものです。先行して取り組んでいる他団体に資料や仕組みを共有してもらうことや、実際に現場へ参加・同伴し、マニュアル化されづらいコーディネーターの振る舞いや言葉遣いなどから、自団体に応用可能な工夫を探し出すことが有効です。

STEP 3

それから、言葉にしてみよう！

先行団体への視察やヒアリングも、そのままでは団体の血肉になりません。団体内部で共有や振り返りの機会を持ち、書いたり、声に出したりして、市民参加促進のために真似したいポイントを「言語化」しておきましょう。ボランティアや住民参加の事業に直接は関わらないスタッフもその場に同席しておくことで、施策の前提や考えを共有することができ、取り組みの推進がスムーズになります。



STEP 4

やっぱり、仕組みをつくろう！

他団体・他地域から、自団体のコーディネーターとなるスタッフや代表に優れた知見やノウハウを移転することができても、それが属人的では、市民が安心して参加できる“器”になったとは言えません。「マニュアルやチェックリストづくり」「所定のフォーマットへの記録」「コーディネーターへの同行研修」「関連書籍の読書会」などやり方は様々。自団体にあった形で、持続的な仕組みを整えていきましょう。

STEP 5

最後に、振り返りこそ皆で！

様々な人が関わる参加促進の取り組みは時間がかかり、また、その成果は目に見えるものとは限りません。だからこそ定期的に、実際に関わった関係者の皆で何が起こったか、何を感じていたのか振り返る機会をもつことが大切です。その結果、「そんな事を考えていたのか」「なるほどやって良かった」「次は改善したいね」など、新しい気づきや今後につながる視点を得て、事業や組織全体の幅を広げることができます。

市民参加研究会とは

トヨタ財団のイニシアティブプログラムにより実施された「多様な人々の地域/社会参加を促進するための助成プログラム開発に向けた調査事業」の実施主体として組織された研究会です。座長の早瀬昇をはじめ、日々市民参加に向き合う以下のメンバーを中心に検討を重ねました。
NPO（NPO法人だけでなく地縁組織等も含む）が市民参加の「受け皿」となることで、多様な人々が地域や社会をつくる・変える役割を発揮し、民主主義的にありたい未来を実現できる社会を目指すことは、今後ますます重要になると考えます。そのためには、NPOが人と社会をつなぐコーディネーションを進め、市民一人ひとりをエンパワメントすることが重要であるという考えに基づき、ヒアリング調査等を実施しました。
トヨタ財団では、研究会での議論を参考にパイロット助成として非公募で6団体へ助成を実施しました。

社会福祉法人 大阪ボランティア協会
理事長　早瀬 昇

ＩＣＴ系の技術者になるはずが、大学入学直後、「参加」の魅力を発信する大阪ボラ協に出会い、人生を転換。32年間、職員として関わり、2010年に退職後もボランティア役員として活動。「参加の機会」を提供して人々を改革の主体にするNPOの運営スタイルを拡散中。座右の銘は「駄目でモトモト！」

公益財団法人 長野県長寿社会開発センター
主任／シニア活動推進コーディネーター　戸田 千登美

社会福祉協議会のボランティアコーディネーター・日常生活自立支援事業の専門員を経て現職に。これらの仕事を通じて、人の力を信じられるコーディネーターに育てていただく。企業とNPO・ボランティアをヒト、モノ、コトでつなぐ「ながのボランティア・市民活動支援ネットワーク」理事。「まちの縁側育みプロジェクトながの」にも参加。

認定NPO法人 アカツキ
代表理事／職員　永田 賢介

「参加と協力の仕組みを育てる」をミッションに、クライアント団体へのヒアリングと整理、可視化を通じて、組織内の議論／対話の場と機会をつくる伴走型のコンサルティングを行う。2018年度より、「立ち止まり対話するための助成金」AKBN（アケボノ）ファンドのプログラムによる助成支援も開始。

特定非営利活動法人 ハンズオン埼玉
理事　西川 正

「自分のまちに愛着がない」と答える人が、日本でもっとも多いまち埼玉で、『おとうさんのヤキイモタイムキャンペーン』など「遊び／あそび」をキーワードに、人と人が出会い、つながり、共に動くためのさまざまなプロジェクトを試行・実践中。PTA等、地域活動にまつわる「負担感」についても研究中。

助成・問い合わせ先
公益財団法人 トヨタ財団

〒163-0437
東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル37階

Tel. 03-3344-1701
Fax.03-3342-6911
HP.https://www.toyotafound.or.jp

事務局
社会福祉法人 大阪ボランティア協会

〒540-0012
大阪市中央区谷町2丁目2-20 2F
市民活動スクエア「CANVAS谷町」

Tel.06-6809-4901 / Fax.06-6809-4902
Mail.office@osakavol.org
HP.http://www.osakavol.org

あとがき

先日、友人と京都の山の上にあるカフェにいきました。そのカフェは、歩いてしかいけない場所にあり、スマホで調べても道はなし。一度行ったことがあるという友人の記憶は極めてあいまい。「あれ、こっちだったかなあ、やっぱりこっち？……」結局、かなり遠回りして、道行く人に尋ね、汗だくになってようやくたどり着きました。「本当にこの道でよいのか？」というドキドキの時間でしたが、今思うととても楽しい思い出になりました。

もちろん、迷い道がいつもよい思い出になるとは限りません。この時は十分に時間があって、かつその友人は「あら、こんなところにきれいな花が」などとハプニングを楽しめる人だったので、結果、愉快な珍道中になりました。しかし、もし急いでいたり、互いに「おまえのせいだ」と責めあうような関係だったら嫌なだけの記憶となります。

現代社会は、システム社会。ハプニング、イレギュラーがことさらに忌避される社会です。そのために、さまざまなルールが張り巡らされています。

一方、市民活動は、人と人が出会い、直接に向き合うことで大きなエネルギーが生まれるところにその魅力があります。だからこそ、しばしば当初の予定通りにいかなかったり、時には人間関係が不安定になり、その調整に追われたりもします。

でも、何かが起こったとき、時間と気持ちに少しの余裕（あそび）があれば、そして一緒に悩み、味わってくれる仲間がいたら、その出来事は単なる失敗ではなく、かけがえのない思い出にもなっていきます（ゆえに22ページ「まずは団体内部で話し合おう！」が大切です）。

ゴールを設定することから旅ははじまりますが、旅の醍醐味は、道中にあり。
まずは出発してみませんか。

この冊子が、楽しく迷うための地図になっていれば幸いです。
何かあったら一緒に考えます。ご連絡お待ちしてます。

市民参加研究会

ことば辞典

参加研究会の立ち上げにあたって、メンバーが最初に取り組んだことが「言葉の意味のすり合わせ」と「市民参加のタイミングや段階を考えること」でした。研究会が大切にしたのは「どうすれば労働力としてのマンパワーを巻き込めるか」ではなく、「NPOやコーディネーターは、どうすれば人々が楽しくやり甲斐を持って、参加できる器やつなぎ役になることができるのか」でした。言葉遣いひとつとっても、主権は市民・個人であるという考えかたを大切にしています。
この冊子をより深く理解するためのことばの整理です。

市民参加

・私事（わたくしごと）が社会を良くしていく取り組みであり、
同時に市民が自らを教育していくプロセスでもある。

・必ずしも、自治体や居住区における住民参加のみを指すものではない。

当事者

・社会における問題の渦中にいる人、
また、渦中ではないが周囲にある問題を
自ら意図して引き受け、次の社会を
つくっていこうとする人も含む。

・逆は第三者、他人事など。

主体的（性）

・自ら決めることができる意思や行動原理のこと。
但し、何かを「する」だけではなく、
「しない（拒否する）」ことも主体性の表れの一つと捉える。

・発揮の程度には段階がある。

・逆は客体、「○○される」等。

市民自治

・社会を形づくる要素として「自律」と「合意」を、
対話を通じてすり合わせ、落としどころを
見つけていく技術やその結果。

・逆は支配、管理、他律、トップダウンなど。

市民

・時に理解し合えない隣人と
共に生きていこうとする人。

・自治体や居住区における
住民を指すものではない。

コミュニティ

・固有の間柄があり、お互いの顔が見える距離感での関係性が、
様々な理由でつながっている地域、空間、人の集団のこと。

・自らが編集可能である、影響を与えることができると信じられる範囲。

・逆は不特定多数、取替え可能な関係、サービスと消費でつながる関係。

コーディネーション

・情報や関係性を対等につなぐことで、
双方を主体としながら共感を経て
夢や理想を共に実現する、
課題を解決する仲間にしていく技術のこと。

・その人の置かれている状況の診断や、
役割に対する意味付け、マネジメント等を通じて
参画を発掘し、協働にしていく営み。

あそび

・やりたいことをすることと、
そこに自らの工夫を持ち込めること、
自分の意思で調整や変更が可能な余白があること。

・逆はやりたくないこと。

ボランティア

・職員とは違う役割を担う、対等な団体メンバー（下請けのマンパワーではない）。
・「手弁当」を基本とし、無償であるからこそ強い主体性や創造性が発揮され、安易な有償化はお客さん化につながる。
・感謝の気持ちなどでつながり、金銭とは異なる対価を得ている。

hint 豊かな社会を実現する市民参加のすすめ方

発行月 ： 2019年9月
発行 ： 市民参加研究会

執筆 ： 早瀬昇、戸田千登美、永田賢介、西川正
デザイン・イラスト・編集 ： NPO法人Co.to.hana